

「情報知識学思案… (3)」

Ver. 2.5

村上 茂三

**Some Attempts for Making an Expanded Paradigm
for Information and Knowledge Science. … (3)**

Shigezo Murakami

(Samatha Vipasyana Res. Observatory)

Abstract

We have been making some attempts for a new paradigm of Information and Knowledge Science. Researching our specific subject “Database for getting new ideas or thoughts”, we are always feeling some intellectual gap between the Western thinking manners and ours. Naturally, present Information and Knowledge Science is established on Western Civilizations. On the other hand, our thinking manner is based on Japan Culture. Recently they say that our Japan Culture is unique among many World Civilizations. So we hope new frameworks of which foundation is constructed the complexes of Japan Culture and others. Toward this difficult but pleasant subject, we began to make a small first step. At present we are interesting in the following ideas as the viewpoints.

1. Our hope is that the New Paradigms must be based on not only Western Civilizations but also Eastern and Japan Culture.
2. We have many types of unique logic, arts and skills in our culture. Through the Ancient and Middle times, some of them were born in Japan islands and others came from Korea, China and India
3. Now we are trying to discover new merits among them from the viewpoint of information system.

1. はじめに：新学待望の原点：設立趣意書・総会議論など。

1. 1 「入力以前の基本的問題研究」、「本質に関わる理論の体系化」、「国際的視野に立つ学問」、「人類の発展と福祉の為の学問」などの革新的提案が為されている。一つの極論として、「既存の情報関連学では、扱わない、或いは、扱い得ない課題を“も”対象」と為し得る新学、及び新学会を希求している。（*1）

2. 新学探求の原認識：目標と起原。 Paradigm へのアプローチ。

2. 1 目標は新学体系枠策定の一つの試み（paradigm：論理・思考枠：認識体系）と、それと呼応する一つ具体例作成（発想支援知識システムの設計＝DC：“Data Complex”）（*2）である。

2. 2 個人にとって「学問は超越的であると同時に、極めて内在的である。」(*3) という点を原認識としている。
 2. 3 「発想支援型知識システム研究」過程に於いて、従来の情報知識科学に基く考え方や技術のみでは、「覆い切れない発想様式・論理構図」が、私達の日常の思考・発想様式に、大きな比重を占めている事を痛感させられてきた。故に、私達は、「欧米流、若しくは西欧古典系論理学を起用する際の違和感・不飽和感」を臨床的原点とした。具体的検討課題は、「日本流、及び、その源流の発想様式と、欧米流知識システムの調和を目指した解釈・斟酌」を試みる事である。
 2. 4 一方、新学創生という一般化対処の見地からは、前項の試みを「文化・文明レベルからの本質的接近」と見做し得る。折しも異文化間衝突や日本文化のユニーク性が注目されている(*4)。
 2. 5 今、此处で用いる文化・文明の定義は、「その社会に於けるものとのとらえ方」という程の“柔らかい、広い意味”にしておく>(*6)
 2. 6 難題は、価値観の多様性を伴う paradigm の学問体系への組込具合である。未だ、戸惑い状態であるが、黒澤一清先生の **S-F Scheme** (*5) に倣う。「人類発展の為の学問」を標榜する限り、医学における Hippokratês の箴言の如き位置付けから、現代情報社会への働き掛けは可能なのか？ 然し、此の点が mission-oriented 型学問の眼目はである。慣習通り curiosity-driven 型学問ならば「社会効果は誰かの仕事！」で済ませる。
3. 新学策定の方法：新学構造を想定し、合目的的な評価方式を採用する。
 3. 1 “新データコンプレックス”設計端緒は、科学知的（自然科学的）評価では無く敢えて経験知的評価（社会科学的：経験科学的評価）(*7)を以って開く。
4. 新科学の構造：特に専門科学誕生期の構造について。
 4. 1 村上陽一郎先生(*8)のご主張を基に、私達なりに立論してみれば、「近代科学は19世紀半ばヨーロッパで成立した。」「哲学や神学に対比した“常識的な意味での科学的な知の営み”即ち、各種分野の専門的な知的活動は、古代から行われてきている。しかし、この頃、科学は“社会のなかの制度として確立”されてくる。」という趣旨になろう。
 4. 2 「現在では、専門科学者共同体の生み出す知識の量と質とが増大した結果、科学はその性格を変貌している。」点が重要である。19世紀には、「知識を愛する」という個人的動機に内発する「好奇心駆動型」(curiosity-driven)の科学を社会も評価・支援して来た。しかし、ナチス・ドイツなどでの科学のあり方に対する批判から、倫理的価値意識が問われ“CUDOS”(*9)や“PLACE”(*10)が提案された。現在では有力科学はもはや好奇心駆動型では有り得ず、「使命誘導型」(mission-oriented)

が相当部分を占めるようになってきている。科学技術基本法の制定事情なども、この一証左である。

5. 新科学の評価法：新学構造部分に対応した評価が必要。
5. 1 自然科学でさえも、胎動期には全知識（経験知）的価値評価段階を経る。生育期、専門知識が確立するに従い、固有知識（専門科学）的評価局面を迎える。即ち、個々の専門科学は、その成熟度や社会的効果との関連により、時宜に適った多面的な評価・批判を必要とすることが判る。
5. 2 従って国産新学の場合は、欧米で胎動・誕生させられ、既に専門科学の筋道を体した状態で本邦に伝来される「欧米科学」とは異なった評価視点が必要である。「情報科学以前・本質的課題」等の言葉の「外延」は、確実に全知識的評価に辿り着き、新学誕生を予感させる。故に、価値観・使命感(内発的)を伴う「思考・論理枠(paradigm)」の設定に当っては、ひとまず、既成の自然科学的合理的制約を緩和し、自己照査、経験知的探策を行う。私達は、これを「**観論創学・思案**」と呼ぶ。（*11）
5. 3 その場合、構造と評価法との関連は、次のように考える。
 - ① 個人的内発部分：この領域の評価は「内面的真実」。只管、本人の**思案次第**。言換えれば、形而上的、倫理的評価を受けることになる。
 - ② 経験科学的部分：当然、形而上性を持つ。「臨床の知」(M. Foucault)である。上野千鶴子先生は『「自己との対話」のような独我論的な知でもないし、だれがみてもそれと指定できるような「客観的な知」でもない。むしろ自己と他者との相互交渉の中から生まれる「対話的な知」である。自己と他者との「場」の共有から生まれる「共同制作」の産物である。』（*7）と分析されておられる。此のご見解は私達を勇気付けて呉れる。この遣り方こそ「日本文化」流であり、よく馴染んでいるからだ。そして、経験知は経験的対応物持ち、他者によって承認を受けなければならないとのことである。 **新“学会”の存在意義は大きい！**
 - ③ 自然科学的部分：この「知」こそ客観性・法則性・論理性・検証可能性などを備えたものであり、自然科学的評価の対象となる。
6. 日本文化・東洋文明からのマネット案件：欧米文化起原諸事との具体的調合候補。
☆現段階は有望候補の直感的選定局面。詳細検討結果は後刻別機会にて。乞ご容赦。
6. 1. 論理関連：「非有非無の思想（釈尊）」、「名号の思想（親鸞）」、「即非の論理（鈴木大拙）」、「絶対矛盾的自己同一の論理（西田幾多郎）」等。
6. 2. 自然観：「因縁和合説（原始経典）」、「空化中の理：止観（天台智者大師）」等。
6. 3. 要因総合判定：（欧米流要因分析に対比）“多彩要因調和法（仮命名）”等。
6. 4. 世界観：「氣の思想」（小野沢精一：東大：昭和52年度文部省科研費）等。
6. 5. 意思表示・伝達：「不立文字（達磨）」、「日本流含み論理」等。

6. 6. Interface : (欧米流対話型対比)「共話・協話型(久保田真弓先生:関西大)」等。

7. 註釈

- * 1. 殊に「屋上屋を架けるわけでは無い。」との大先輩のご指導に感銘を受けている。別言すれば、新学・新学会は広く世界に対して新しい門戸を開き、従来、陽の目を見ることの少なかった研究をも発掘する特色を備え得る可能性を持つ。
- * 2. 情報集積システムは、当初の data bank 概念から始まり、より組織的な data base 概念に発展し、今や“超”データベース実体である。次世代新学からの発信として、先ず「言葉」を投掛けることとした。
- * 3. 特に、検討初期段階では「内在性」に重点を置いて、解析、展開を試みている。
- * 4. S. P. Huntington 先生 (ハーバード大:「The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order」) など。
- * 5. 黒澤一清先生 (東工大・放送大学) が提唱された「S-F Scheme : Substance - Structure- Form- Function という4側面の統一物として認識する分析枠組み」。
- * 6. 文化人類学寄りの定義と言えようか。福井勝義教授 (京大:「無文字社会の豊かな創造力」;人間講座) など。
- * 7. 社会科学的評価については、上野千鶴子先生 (東大:「<わたし>のメタ社会学」) など。
- * 8. 村上陽一郎教授 (国際基督教大:「新しい科学史の見方」) など。
- * 9. Robert Merton : Communalism (公有性)、 Universality (普遍性)、 Disinterestedness (無私性)、 Organized Skepticism (組織化された懐疑主義)。
- * 10. J.Ziman : Proprietary (所有的)、 Local (局地的)、 Authoritarian (権威主義的)、 Commissioned (請負的)、 Expert (専門家的)。
- * 11. 若し、創学因を「科学的新規性」に在ると認識するならば、直行的に、科学知的検討を開始できる。また、縄文学会や顔学会の例に見られるような「新規場設定」の場合も、集積・総合・展開など合理的検討から始めることが可能である。然し、本題の如く、「本質的・根源的なニーズ先導型」創学の場合は、まず、「新学への期待・必要性の解析」を優先する方が“楽しい”。